

介護福祉士養成のための衣生活に関わる教育内容について

内田幸子・児玉直樹・雨宮邦子¹⁾

久慈るみ子²⁾・斉藤秀子³⁾

(受理日 2012年9月27日, 受稿日 2012年12月13日)

On the Educational Content of Clothing Life for Training Care Worker

Yukiko UCHIDA・Naoki KODAMA・Kuniko AMEMIYA

Rumiko KUJI・Hideko SAITO

(Received Sept. 27, 2012, Accepted Dec. 13, 2012)

I はじめに

我が国では、急速な高齢化が進み、2025年には75歳以上の後期高齢者数が2,000万人を超えることが見込まれており、厚生労働省は認知症高齢者や医療ニーズの高い重度の高齢者に的確に対応できる質の高い人材を安定的に確保していくことが喫緊の課題としている¹⁾。このような背景のもと、より一層質の高い介護福祉士を養成していくことを目指し、介護福祉士養成課程における教育カリキュラム等の見直しが行われ、平成21年度の入学生から新カリキュラムに則り、養成教育が始められた²⁾。新カリキュラムでは『介護』『人間と社会』『こころとからだのしくみ』の3つの領域からなる教育内容を示し、それまでの介護福祉士養成教育において「生活」の領域を担ってきた「家政学概論」「家政学

実習」は、『介護』の「生活支援技術」等の科目に分散された。介護福祉士養成教育内容の生活支援に関わる家政学の領域は、生活経営、食生活、衣生活、住生活の4領域から構成される。

介護福祉士養成教育における家政関連科目教育全般の課題について、田崎ら³⁾は在宅介護担当者へのアンケート調査をもとに家事援助サービスの実態と課題を検討し、奥田ら⁴⁾は家政系担当教員へのアンケート調査から、家政系教員の過半は非常勤教員であること、介護現場の経験が乏しいことから教育効果をあげにくいと課題を示し、神部ら⁵⁾は学生意識調査から家政学概論の見直しの必要性を示している。しかし介護福祉士養成教育における家政関連科目全般についての研究³⁾⁴⁾⁵⁾はあるが、衣生活に関わる教育内容について検討した事例はみられない。介護福祉士養成教育における授業の介護現場の要望に対応させた内容とすることを目的として、介護就業者を対象に調査を実施、衣生活に関わるどのような教育内容が必要であるかについて

1) 山梨大学(非) 2) 尚絅学院大
3) 山梨県立大学

検討が必要と考えられる。

また、大学における介護福祉士養成課程において、衣生活に関わる教育内容^{6~11)}は「介護の基本」、「生活支援技術」等の授業時間数の中で行われ、カリキュラムに準拠した内容としているが、具体的な教育内容および方法は各介護福祉士養成校の科目担当者の判断に委ねられており、如何に介護ニーズに適応した教育内容とするか手探りで構築せざるを得ない状況で、工夫が求められている。特に実習に配分できる時間数は、教育施設において大幅に異なり、学生の既習状況に差が生じていると推察され、介護福祉士養成講座の衣生活に関わる分野の内容や方法について、課題が多い現状にある。

そこで本研究では、著者らが関係する介護福祉士養成講座受講者や介護サービス従事者を対象に調査を行い、介護福祉士養成の教育内容についての検討を試みた。本研究は、より質の高い介護福祉士養成のためにどのような教育内容としたらよいかについての検討資料として意義があると考えている。

II 方法

本調査は、著者らが関わる介護福祉士講座、サービス事業等の介護従事者または介護従事経験を対象として行った。平成19年10月～20年2月の期間に、山梨県の介護福祉士養成講座受講者と山梨県の福祉サービス関連会社介護従事者、群馬県の介護福祉士養成講座受講者を対象として、アンケート調査を実施した。介護福祉士養成講座は、介護福祉士の資格取得試験受験のための講座であり、この受験のためには介護従事経験が求められており、調査回答者全員が介護従事者あるいはその経験者である。調査

目的と個人情報厳守される旨を説明して質問紙を調査者が配布し、回答後は被調査者が調査者に郵送にて送付した。

質問紙の回収は山梨県の介護福祉士養成講座受講者32名、山梨県の福祉サービス関連会社介護従事者45名、群馬県の介護福祉士養成講座受講者48名（回収率87.4%）、また有効回答率は87.2%であった（表1）。

表1 アンケート調査の概要

	配布数	回収数	回収率	有効回答	有効回答率
山梨県介護福祉士養成講座	40	32	80.0%	22	68.8%
山梨県の福祉サービス関連会社介護従事者	53	45	84.9%	39	86.7%
群馬県介護福祉士養成講座受講者	50	48	96.0%	48	100.0%
計	143	125	87.4%	109	87.2%

調査した質問項目は被調査者に関わる事項および介護の際に必要な衣生活の知識32項目と実習・実験で習得する衣生活の技術35項目についてである。介護福祉士養成教育における衣生活に関わる内容は、衣服の役割と機能、被服の素材、高齢者・障害者の衣服、被服の管理、縫製の基礎と被服の修繕等がある。調査に用いた質問項目（介護の際に必要な知識に関する32項目、同技術に関する28項目）は、介護福祉士養成課程で用いられているテキスト^{6~11)}から衣生活に関わる項目を選び出した（表2）。また、介護の際に必要な技術に関する項目として、著者らが製作実習の内容として研究を進めているロックミシンを利用してのTシャツの製作^{12,13)}、著者らが授業実践を行っている製作例、必要と思われる製作例より7項目を加えた。回答には1～4の評点（1：重要である、2：やや重要である、3：あまり重要でない、4：重要でない）を設け、番号を記入してもらった。

表2 調査項目

I	回答者に関する質問事項 1. 性別 2. 年齢 3. 居住県 4. 介護に関わる仕事をしているか否か 5. 施設の種類 6. 仕事の継続年数
II	被服に関する知識について、介護の仕事をする際に必要かどうかについて 32項目
III	被服に関する技術の修得や実験について、介護の仕事をする際に必要かどうかについて 35項目

*「重要である」を1、「やや重要である」を2、「あまり重要でない」を3、「重要でない」を4とした

III 結果および考察

1. 調査結果

(1) 回答者の属性

本調査の回答者全員が介護現場で働いている。回答者の性別では、男性7人(6%)、女性102人(94%)で女性の割合が高かった。回答者の年齢構成(表3)は50代が最も多く42人(38.5%)、次いで40代が39人(38.8%)、30代が13人(11.9%)、20代が12人(11.0%)、60代が3人(2.8%)で、平均年齢は男性が40.1歳、女性が45.5歳であった。勤続年数は3年が最も多く27人(24.8%)、次いで4年と5年ともに23人(21.1%)で、平均勤続年数は4.5年であった。

表3 回答者の年齢構成

年齢	山梨県		群馬県	
	人数	(%)	人数	(%)
20歳以上29歳未満	11	(18.0)	1	(2.1)
30歳以上39歳未満	9	(14.8)	5	(10.4)
40歳以上49歳未満	22	(36.1)	19	(39.6)
50歳以上59歳未満	17	(27.9)	21	(43.8)
60歳以上	2	(3.3)	2	(4.2)
計	61	(100)	48	(100)

(2) 介護の際に必要な知識に関する項目の結果

介護の際に必要な知識に関する項目の平均値を表4に示す。これらの調査項目の平均値が低いほど、介護福祉士として必要とされる知識と

して介護従事者が重要であると考えているということになる。全項目の平均値は1.44で「やや重要である」から「重要である」の間の数値であり、被服に関しても介護に必要な知識への認識が示されたと考えられる。最小値は1.07、最大値は2.23であった。介護の際に必要な知識について「重要である」との回答率が高い項目は、「身体障害別、体の動きの特徴」、「身体障害に応じた衣服の選び方」、「要介護の高齢者の衣服、寝具、寝衣、オムツ」、「身体障害に応じた更衣動作、更衣のための自助具」の項目であった。逆に「あまり重要でない」と考えられている項目としては、「糸の太さの呼び方」、「縫い糸や編物糸の種類」、「織物、編物、それぞれの特徴」の項目が挙げられた。

表4 介護の際に必要な衣生活に関わる知識

調査項目	平均値
身体障害別、体の動きの特徴	1.07
身体障害に応じた衣服の選び方	1.07
要介護の高齢者の衣服、寝具、寝衣、オムツ	1.08
身体障害に応じた更衣動作、更衣のための自助具	1.10
高齢者・身障者の体温調節の特徴	1.16
高齢者の体型や姿勢、動作の特徴	1.18
衣服の体を守る役割や社会的役割	1.19
家庭での洗濯(洗剤と洗濯の手順)	1.21
服を選ぶときの注意点(素材やサイズの表示法)	1.25
寒さ、暑さと衣服の選び方	1.30
人が服を着る理由	1.31
体のつくりと動作による体の動き方	1.31
快適に体を動かすことの出来る衣服とは	1.32
ヒトの体温調節を補助する衣服の働き	1.33
衣服のT、P、Oによる選び方	1.35
衣服の漂白としみ抜きの方法	1.35
衣服の呼び方	1.38
衣服素材の種類(綿、ウールなど)と特徴	1.43
ユニバーサルデザインを応用した被服事例	1.47
体と衣服の形やデザインとの関係	1.52
衣服の汚れの種類	1.55
洗剤で衣服の汚れが落ちるメカニズム	1.56
服の種類とその布地の特徴	1.57
介護の必要が無い高齢者の衣服の選び方	1.57
ユニバーサルデザインとは何か	1.61
衣服のクレーム事例と安全に関する法規	1.63
クリーニング屋さん利用の注意点	1.65
衣服のために開発される新しい素材	1.71
繊維が衣服素材に用いられる理由	1.80
織物、編物、それぞれの特徴	1.84
縫い糸や編物糸の種類	1.94
糸の太さの呼び方	2.23
平均値	1.44

このように、要介護者、あるいは身体障害者に接する際に必要となる衣服の選び方、寝具、寝衣、オムツ、自助具についての知識、更衣動作等、介護に関わる衣生活についての具体的知識が求められていた。一方、糸そのものや織物・編物に関する知識はあまり重要視されていなかった。身体障害に応じた衣服や要介護高齢者の衣服、寝具、寝衣、オムツ等に関する商品知識や使用方法、利用者の身体状態に応じた衣服の選択、支援方法が重要であることが示唆された。これらの教育内容は、既存の衣服をどのようにリフォームして着用するか、市販されている衣服自助具等の存在を知らない利用者の衣生活の支援に直結して役立つと考えられる。

(3) 介護の際に必要な技術に関する項目の結果

介護の際に必要な技術に関する項目の平均値を表5に示す。全項目の平均値は2.12で、先に述べた介護に関する知識よりやや大きい値を示し、重要度はやや低いという傾向が示された。最小値は1.32、最大値は2.85であった。実習・実験を通して介護福祉士として必要な技術について、「重要である」との回答率が高い項目は、「介護に必要な服の実際と更衣介護の体験」、「介護に必要な服の種類（本や福祉プラザ等の情報）」、「衣服内の温湿度測定による衣服の快適性の理解」、また、衣服による圧迫や、ウエストのゴム入れ、ボタンつけ、裾まつり、スナップつけの技術についてもやや必要と回答しており、日常生活において必要となる技術の習得と快適性についての理解が求められていた。逆に「あまり重要でない」という回答率が高い項目は、「Tシャツをロックミシンで作る、服に対する理解を深める」、「既製服と同様にパソコンで製図

を作る実習」、「ミシンを使ったポケットつきハーフパンツの製作」の項目が挙げられた。

このように、介護現場で実際に必要な衣服の種類と更衣介護の体験等、介護に関わる衣生活についての具体的技術が求められていた。一方、服作りや既製服作りに求められるような製図作製の技術はあまり重要視されていなかった。介護に必要な服に実際に触れ、更衣介護を体験することで、利用者の立場にたった衣生活支援方法を習得でき、ゴム紐とおし、ボタンつけ、ズボンの裾まつり、スナップつけの技術を身につけることで、利用者の実生活に沿った支援ができるのではないかということが示唆された。介

表5 介護の際に必要な衣生活に関わる技術

調査項目	平均値
介護に必要な服の実際と更衣介護の体験	1.32
介護に必要な服の種類（本や福祉プラザ等の情報）	1.41
衣服内の温湿度測定による衣服の快適性の理解	1.50
ズボン胴部の圧迫の程度を測定し、衣服の快適性を理解する	1.55
ウエストなどのゴム紐とおしとその始末	1.57
二つ穴・四つ穴ボタンを付ける	1.71
ズボンの裾をまつりつける方法	1.71
スナップをつける	1.74
布地の空気の通りやすさ（通気性）に関する実験	1.84
漂白としみ抜きの実習	1.85
浴衣の着付けの介助（車椅子、高齢者の場合等）	1.86
布地の汚れ落ちの仕組みを理解するための実験	1.92
布地の水の吸い上げ方（吸水性）に関する実験	1.93
手縫いで直線縫いと玉止め	1.97
汗をかいた時の衣服内の快適性を予測するための実験	1.99
布地の保温性測定実験による素材の保温性の理解	2.05
かぎホックを付ける	2.08
靴下を履くための自助具の製作や、紐を付けた靴下の製作	2.10
燃焼をすることによる繊維の鑑別	2.17
日常着（ワイシャツ、ズボンなどの）アイロンがけ	2.17
ミシンでのマジックテープ付け	2.20
ミシンでの直線縫いと糸の始末	2.25
日本特有の文化の理解（風呂敷の包み方など）	2.27
男女の浴衣の着付け	2.30
ゴム糸を使ったボタン付け	2.37
ミシンでのジグザグ縫いによるズボン裾などの端の始末	2.39
布地の厚さや糸の本数を測り、素材を理解する。	2.39
ロックミシンでのズボン裾などの端の始末	2.44
編物の基礎	2.58
ミシンを使ったポケットつきエプロンの製作	2.66
ミシンによる袋物の製作	2.70
刺し子をしたコースターの製作	2.73
ミシンを使ったポケットつきハーフパンツの製作	2.78
既製服と同様にパソコンで製図を作る実習	2.81
Tシャツをロックミシンで作る、服に対する理解を深める	2.85
平均値	2.12

護の際に必要な衣生活の技術を限られた実習回数で習得させるためには、これら介護現場でのニーズに対応した内容とした教育内容にしていくことが求められると考えられる。

2. 因子分析

以上の調査結果をもとに、介護福祉士として身につけておくべき介護の際に必要な衣生活に関わる知識および技術を明確にするために因子分析を行った。なお、統計解析には SPSS 19.0 for windows を使用した。

これにより、介護福祉士養成教育において、衣生活に関して習得させる知識と技術の内容を検討する資料となると考えられる。

(1) 介護の際に必要な知識に関する項目の因子分析の結果

調査項目の 32 項目について、因子分析を行った。因子分析を実施するにあたり、Kaiser-Meyer-Olkin のサンプリング適切性基準を測定し、因子分析を行うことが妥当であるかどうか検討した。因子抽出法には最尤法を用いて、プロマックス回転を行った。表 6 に示すように Kaiser-Meyer-Olkin のサンプリング適切性基準の値は 0.825 と高い値であり、因子分析を適応してよいと判断することができた。Bartlett の有意確率は $p < 0.001$ であるため、因子分析を行うことに意味があるという結果が得られた。

表 6 KMO および Bartlett の検定

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測定	0.825
Bartlett の球面性検定	近似カイ 2 乗 2433.111
自由度	496
有意確率	0.000

介護の際に必要な衣生活に関わる知識の重要度について、3 因子で 32 項目の全分散を説明す

割合は 46.8%であった。表 7 にプロマックス回転を施した結果を示す。因子を説明する項目としては、因子負荷量 0.5 以上の項目を選択した。第 1 因子は「縫い糸や編物糸の種類」、「織物、編物の特徴」などが高い因子負荷量を示したことから、この因子を「衣服の素材についての知識に関する因子」と解釈した。第 2 因子は「身体障害に応じた衣服の選び方」、「高齢者・身体障害者の体温調節の特徴」などが高い因子負荷量を示し、この因子を「高齢者・身体障害者の衣服についての知識に関する因子」と解釈した。第 3 因子は「人体構造と動作」、「ヒトの体温調節と衣服の働き」などが高い因子負荷量を示し、この因子を「衣服の快適性についての知識に関する因子」と解釈した。

表 7 介護の際に必要な衣生活に関わる知識の因子

項目	I	II	III
縫い糸や編物糸の種類	0.886	-0.023	-0.048
糸の太さの呼び方	0.844	-0.106	-0.029
織物、編物、それぞれの特徴	0.811	-0.132	0.165
繊維が衣服素材に用いられる理由	0.786	0.013	0.041
衣服の呼び方	0.648	-0.095	0.072
衣服のために開発される新しい素材	0.642	0.132	-0.199
服の種類とその布地の特徴	0.638	0.029	0.172
洗剤で衣服の汚れが落ちるメカニズム	0.592	-0.055	0.130
衣服素材の種類（綿、ウールなど）と特徴	0.591	0.013	0.055
身体障害に応じた衣服の選び方	-0.066	0.804	0.003
高齢者・身体障害者の体温調節の特徴	-0.166	0.713	0.328
身体障害に応じた更衣動作、更衣のための自助具	0.000	0.682	-0.115
身体障害別、体の動きの特徴	-0.017	0.675	0.025
高齢者の体型や姿勢、動作の特徴	-0.097	0.638	0.213
要介護の高齢者の衣服、寝具、寝衣、オムツ	-0.113	0.582	0.053
介護の必要が無い高齢者の衣服の選び方	0.088	0.524	0.016
体のつくりと動作による体の動き方	-0.020	-0.128	0.911
快適に体を動かすことのできる衣服とは	0.041	0.019	0.891
ヒトの体温調節を補助する衣服の働き	0.001	0.185	0.808
寒さ、暑さと衣服の選び方	0.001	0.068	0.853
因子寄与率 (%)	28.843	9.560	8.372
累積因子寄与率 (%)	28.843	38.402	46.774

(2) 介護の際に必要な技術に関する項目の因子分析の結果

調査項目の 35 項目について、因子分析を行った。因子分析を実施するにあたり、Kaiser-Meyer-Olkin のサンプリング適切性基準を測定し、因子分析を行うことが妥当であるかどうか

検討した。因子抽出法には最尤法を用いて、プロマックス回転を行った。表8に示すようにKaiser-Meyer-Olkinのサンプリング適切性基準の値は0.849と高い値であり、因子分析を適応してよいと判断することができた。Bartlettの有意確率は $p < 0.001$ であるため、因子分析を行うことに意味があるという結果が得られた。

表8 KMOおよびBartlettの検定

Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度		0.849
Bartlettの球面性検定	近似カイ2乗	3432.679
	自由度	595.000
	有意確率	0.000

介護の際に必要な衣生活に関わる技術の重要度について、3因子で35項目の全分散を説明する割合は48.0%であった。表9にプロマックス回転を施した結果を示す。因子を説明する項目としては、因子負荷量0.5以上の項目を選択した。第1因子は「エプロンの製作」、「刺し子をしたコースターの製作」などが高い因子負荷量を示したことから、この因子を「実習による衣服全般の技術習得に関する因子」と解釈した。第2因子は「布地の通気性」、「布地の吸水性」などが高い因子負荷量を示し、この因子を「布地の性能と取扱い技術に関する因子」と解釈した。第3因子は「ロックミシン裾始末」、「ジグザグミシン裾始末」などが高い因子負荷量を示し、この因子を「ミシンによる裾始末の技術に関する因子」と解釈した。

このように介護に関する知識について、「衣服の素材についての知識」「身障者・高齢者の衣服についての知識」「衣服の快適性についての知識」という因子が分析され、衣生活に関わる技術については「実習による衣服についての技術習得」「布地の性能と取扱い技術」「ミシンによる裾始末の技術」に関する因子が分析された。

介護福祉士養成課程における教育内容について、少ない授業あるいは実習時間でどのような内容を伝えていくことが有効かについて、今後、このような枠組みで、これらの知識、技術のグルーピングの中からどのような知識、技術が必要かについての検討ができるのではないかと考えている。

衣服に関する技術については、「実習による衣服全般の技術習得」と「ミシンによる裾始末の技術」が分析された。利用者が在宅や施設等で衣類を新規購入した際には、ズボン丈等の裾始末が必要となる場合が多く、裾をまつりつけるためには、ロックミシンやミシンのジグザグ縫いによる「ミシンによる裾の始末の技術」が要求されることによるのではないかと推察され興味深い。

表9 介護の際に必要な衣生活に関わる技術の因子

項目	I	II	III
ミシンを使ったポケットつきエプロンの製作	0.892	-0.143	0.018
刺し子をしたコースターの製作	0.879	-0.121	-0.020
ミシンを使ったポケットつきハーフパンツの製作	0.835	-0.083	0.126
ミシンによる袋物の製作	0.796	0.050	0.022
編物の基礎	0.784	-0.152	0.095
Tシャツをロックミシンで作る、服に対する理解を深める	0.741	-0.006	0.157
ゴム糸を使ったボタン付け	0.693	0.149	-0.045
ズボンの裾をまつりつける方法	0.629	-0.077	0.120
既製服と同様にパソコンで製図を作る実習	0.627	0.123	0.101
日本特有の文化の理解（風呂敷の包み方など）	0.623	0.085	-0.243
男女の浴衣の着付け	0.613	-0.097	-0.021
日常着（ワイシャツ、ズボンなどの）アイロンがけ	0.566	-0.144	0.143
二つ穴・四つ穴ボタンを付ける	0.539	-0.074	-0.063
布地の空気の通りやすさ（通気性）に関する実験	-0.099	0.990	-0.008
布地の水の吸い上げ方（吸水性）に関する実験	-0.014	0.943	-0.041
布地の汚れ落ちの仕組みを理解するための実験	-0.005	0.826	0.056
汗をかいた時の衣服内の快適性を予測するための実験	0.052	0.738	0.106
布地の保温性測定実験による素材の保温性の理解	0.121	0.712	0.010
衣服内の温湿度測定による衣服の快適性の理解	-0.159	0.567	0.218
漂白としみ抜きの実習	0.245	0.540	-0.130
ロックミシンでのズボン裾などの端の始末	0.018	0.042	0.957
ミシンでのジグザグ縫いによるズボン裾などの端の始末	-0.028	0.167	0.880
ミシンでの直線縫いと糸の始末	0.192	0.144	0.503
因子寄与率 (%)	31.367	8.700	7.949
累積因子寄与率 (%)	31.367	40.068	48.017

(3) 介護の際に必要な知識・技術の重要度と年齢差、地域差、勤務先による差

回答者の属性による差を検討するため、因子分析の後、得られたデータをもとに、年齢差お

よび地域差があるか否かについて、Mann-WhitneyのU検定（ノンパラメトリック）を行った。なお、有意水準は5%とした。

介護の際に必要な知識について、各年齢構成

間では有意差が認められず、統計的処理の問題から年齢的な構成比がほぼ等しくなるように、49歳以下（64名）と50歳以上（45名）で分けた。有意差がみられたのは、「縫い糸や編物糸の

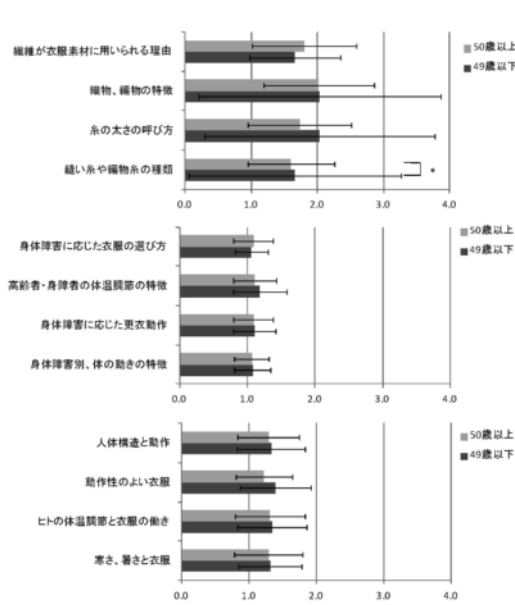


図1 介護の際に必要な知識における年齢差

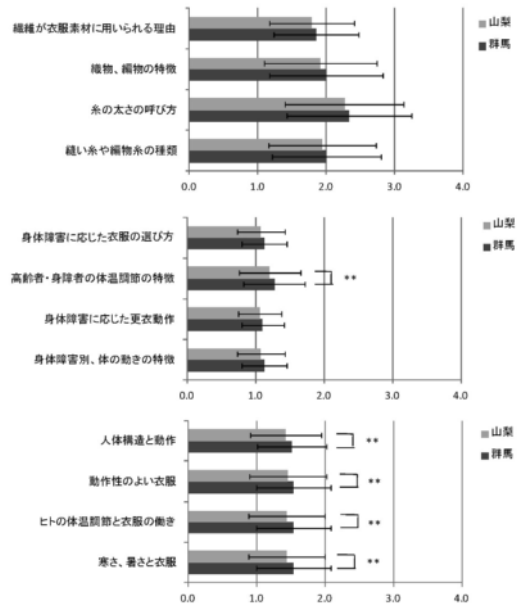


図2 介護の際に必要な知識における地域差

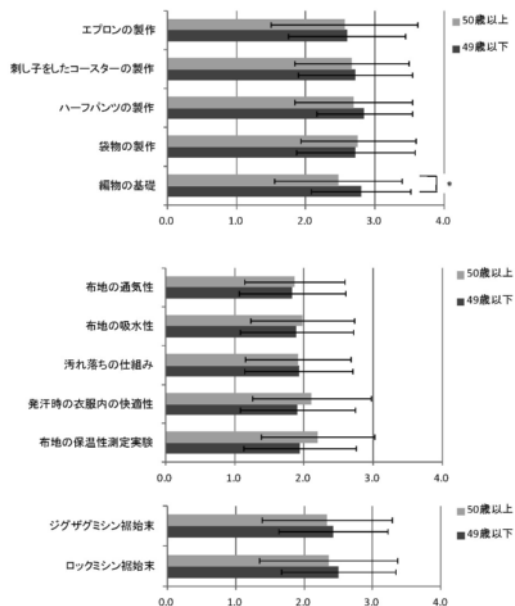


図3 介護の際に必要な技術における年齢差

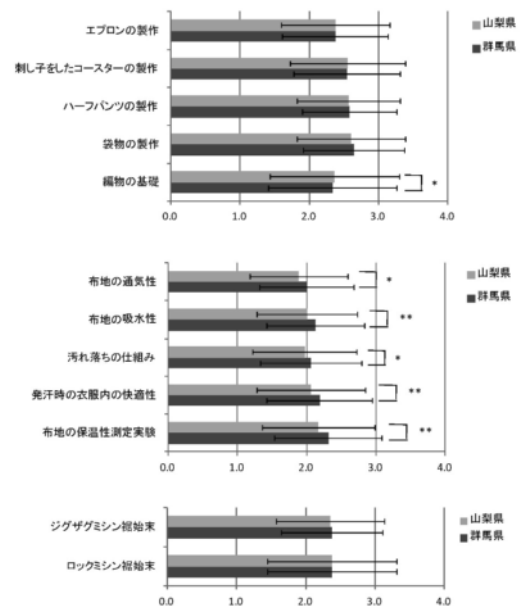


図4 介護の際に必要な技術における地域差

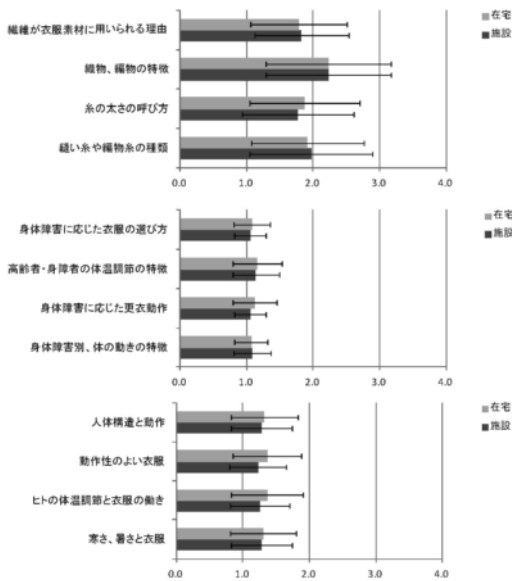


図5 介護の際に必要な知識における勤務先による差

知識」であり、50歳以上の回答者がより重要と考えていた(図1)。地域差については、「高齢者・身体障害者の体温調節の特徴」、「人体構造と動作」、「動作性のよい衣服」、「ヒトの体温調節と衣服の働き」、「寒さ、暑さと衣服」の項目で、群馬県(48名)よりの山梨県(61名)回答者がより重要と考えていた(図2)。

介護の際に必要な技術について、49歳以下と50歳以上で有意な差がみられたのは、「編物の基礎」で、50歳以上の回答者がより重要と考えていた(図3)。地域差については、「編物の基礎」については山梨県よりも群馬県の回答者がより重要と考えていたが、「布地の通気性」、「布地の吸水性」、「汚れ落ちの仕組み」、「発汗時の衣服内の快適性」、「布地の保温性測定実験」の項目で、群馬県より山梨県の回答者がより重要と考えていた(図4)。この理由として、本調査は前述のとおり、著者らが関係する介護福祉士講座、サービス従事者を対象として実施したため、介

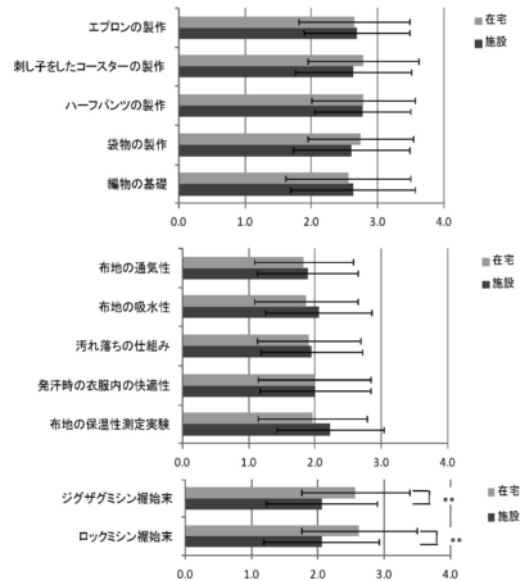


図6 介護の際に必要な技術における勤務先による差

護福祉士講座講義の後に配布しており、該当講座の内容等が影響しているのではないかと推察される。

また、本調査では、回答者の経歴、学歴等の情報を得てないため、経歴や、受けた教育内容との関連について検討できなかったが、今後このような相違の要因が明らかになれば、介護福祉士教育に関し、何らかの参考となると考えられる。

介護の際に必要な知識については、有意差はみられず(図5)、技術については回答者の就業先によって有意差がみられた。「ジグザグミシン裾始末」「ロックミシン裾始末」であり、施設勤務(特別養護老人ホーム、介護老人保健施設等)の回答者が在宅勤務(訪問介護員、サービスステーション)の回答者より重要と考えていた(図6)。このように、施設勤務の場合と、在宅勤務の場合で、必要な技術に相違があることが示唆されたが、教育内容としては、両者に対

応する必要があると考えている。

IV まとめ

介護福祉士養成教育における授業内容を検討することを目的として、介護従事者および同経験者を対象に調査を実施、衣生活に関わるどのような教育内容が必要であるかについて検討した。

衣生活に関わる教育内容の知識および技術の項目について調査した結果、知識としては、「身体障害別、体の動きの特徴」、「身体障害に応じた衣服の選び方」、「要介護の高齢者の衣服、寝具、寝衣、オムツ」、「身体障害に応じた更衣動作、更衣のための自助具」等、介護に関わる衣生活についての具体的な知識が求められていた。技術としては、「介護に必要な服の実際と更衣介護の体験」、「介護に必要な服の種類（本や福祉プラザ等の情報）」、「衣服内の温湿度測定による衣服の快適性の理解」、そして、ゴム紐とおし、ボタンつけ、ズボンの裾まつり、スナップつけ等、介護現場で日常生活上必要な具体的技術の習得が求められていることが示唆された。

因子分析の結果、介護の際に必要な衣生活に関わる知識に関して分析された因子は、第1因子は「衣服の素材についての知識に関する因子」、第2因子は「高齢者・身障者の衣服についての知識に関する因子」、第3因子は「衣服の快適性についての知識に関する因子」であった。介護の際に必要な衣生活に関わる技術に関して分析された因子は、第1因子は「実習による衣服全般の技術習得の因子」、第2因子は「布地の性能と取扱い技術に関する因子」、第3因子は「ミシンによる裾始末の技術に関する因子」であった。

本調査の結果は、介護福祉士養成教育における衣生活に関わる授業内容を介護現場の要望に対応させた内容とするための基礎的な資料となると考えられる。しかし、本調査は、群馬県、山梨県という限定された地域における調査であり、また、調査項目について、さらに精査する必要があると考えられる。さらに、具体的授業内容の検討、実習等での製作品の製作時間、習得できる技術の妥当性についての検討も視野に入れて研究を進めたいと考えている。

平成21年度のカリキュラム改正では、在宅介護推進の流れを受け、訪問介護の技術を介護実習等で強化することがうたわれ、利用者の生活を総合的に支援していくために必要となる家政系科目の内容を強化する方向が明示されている⁵⁾ことから、衣生活に関わる知識・技術の教育内容は、利用者の衣生活を支援する視点から実生活で生かされる技術の習得が重要となる。本研究を進めることにより、利用者の衣生活支援に必要な科学的根拠を踏まえた知識と、利用者の衣生活の整備に必要な確かな技術を習得させることで、介護現場で実践力を発揮できる介護福祉士を養成していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 厚生労働省 HP：社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて、<http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi-kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index.html>
- 2) 社会福祉士介護福祉士社会福祉主事制度研究会：「改訂版 社会福祉士・介護福祉士・社会福祉主事関係法令通知集」第一法規（2009）
- 3) 田崎裕美，鈴木修子：介護福祉士養成教育における家政学の課題に関する一考察，介護福祉学第9巻，第1号，82-92（2002）
- 4) 奥田郁子，石川周子，熊本裕子，倉田あゆ子，嶋

- 崎東子, 中川英子: 介護福祉養成における家政系教育, 介護福祉学第10巻, 第1号, 19-32 (2003)
- 5) 神部順子, 奥田郁子, 熊本裕子, 倉田あゆ子, 嶋崎東子, 中川英子: 介護福祉養成教育のための「家政学」関連科目のあり方, 日本家政学会誌, Vol.54, No.6, 501-510 (2003)
- 6) 白井孝子・柴田範子・本名 靖・綿祐二編著: 「介護福祉士養成テキスト8 生活支援技術Ⅰ」建帛社 45-53 (2010)
- 7) 久保田トミ子・柴田範子・白井孝子・山崎イチ子編著: 「介護福祉士養成テキスト8 生活支援技術Ⅲ」建帛社, 67-102 (2010)
- 8) 中川英子編著: 「介護福祉のための家政学」建帛社, 91-122 (2004)
- 9) 中川英子編著: 「介護福祉のための家政学実習」建帛社, 73-116 (2005)
- 10) 中川英子編著: 「福祉のための家政学」建帛社, 125-173 (2010)
- 11) 介護福祉士養成講座編集委員会編: 「新・介護福祉士養成講座6 生活支援技術Ⅰ」中央法規, 168-186 (2009)
- 12) 内田幸子, 雨宮邦子, 斉藤秀子: CADとロックミシンを用いたランニング型カットソー作製による被服製作教育の試み, 介護福祉士養成のための題材として, 高崎健康福祉大学紀要7, 109-122, 2008-03
- 13) 斉藤秀子, 内田幸子, 雨宮邦子: CADとロックミシンを用いたチュニック型カットソー作製による被服製作教育の試み: 介護福祉士養成のための題材として, 山梨県立大学人間福祉学部紀要3, 61-74, 2008

謝辞

アンケートにご協力頂きました皆様に御礼申し上げます。なお、本研究は「山梨県立大学学部研究費」より研究費を得て行われました。